

なからぎ

165号

2003年10月

続「世界の名著」

農学研究科長 小島 洋一

私の通勤の道に、BOOK OFF という本屋がある。古本屋である。子供の頃、オヤジが奥に座っていてメガネ越しに客を監視し、いかがわしい本を少しでもさわろうものなら、エヘンと咳払いをする、あの暗い意地の悪い古本屋ではない。きわめて、明るくて大きい古本屋なのである。店員もオヤジではない。若くて、はつらつとした（恐らくアルバイトの）男女の若い学生である。自動扉 オヤジのいる古本屋には滅多に自動扉はない、扉はたいがい開けにくい、音をたてるガラス戸である。）を経て中へはいると、「いらっしゃいました、こんにちは、いや、「いらっしゃいませ、こんにちは」かな、コンビニのレジで「以上で宜しかったですか」なんて聞かれると、「いらっしゃいました」と言ってもよい気もするが、とにかく大きな声でご挨拶がある。本の量もすごい、雑誌から単行本、文庫本、漫画は半端じゃない量が、すべて手の届く高さの本棚にきれいに並んでいる。通路は広く、本棚に入りきらない本が足下に積み重ねてあることもない。客は若い人が多い、漫画の前などは明らかに立ち読みに来ている格好である。だらしなく地べたに座って読んでいるものもいる。店員も注意するでもなく、スイスイと動きおおらかである。

本を売りに来ている子供がいる。10冊以上は十分にある漫画をレジに渡し、値踏みがすむまで漫画の書棚で立ち読みをしている。なれた振る舞いである。売りに来て、十分に立ち読みし、買って帰って読む、また売りにくるの循環らしい。立ち読みをとがめると商売が成り立たないのかも。昔、家内が子供の部屋にたまる漫画をひそかに捨てることに苦心したあの時代は去ったのである。

単行本や文庫本の方をみると、客はまばらで、中高年である。推理小説を数冊抱えたいかにも定年後らしきおじさんもいる。さすがズーズーしい立ち読みはいない。本棚を眺めてみると専門書はない、商店街の本屋さんにあるような本ばかりである。古本屋には必ずあった聞いたこともない会社の創業百年史や、暗い本棚の半分以上を占めオヤジが存命中に売れるのかと思わせるような本はもちろんないし、かび臭さもない。文庫本のところへいってみる、そこいらの本屋より沢山あるし、それに新品に近いものも定価の半分前後で安い、少しよけいに買って6冊をレジへ。支払いの時、「読み終わられたらお売りください。」などとレジの子が言う。少しドキッとす。売ることを考えて本を買ったことはないの、なんだか変な気分である。読後売ると本は残らんことになる、頭にも残らん、それでは何も残らんとか。読んだ後本棚にあると忘れかけた内容も思い出せるのではとか。せつかく読んだのにと売るのが惜しくならんとか、心配である。まだまだ修行が足らなくて、読んだ本は手元に置いときたいのである。

帰宅し、以上のBOOK OFF 見聞記と我が心配を話す。と「オヤジ（古本屋のオヤジではない、私のこと）、何言うてんや、読んでしもてよかったやつだけ残して、あとは売ったらええやないか、子供も漫画本は全部そうしとるんやで、「へー、そうやったんか、そんならあそこにある本はだんだん面白くないもんばかりになってきて店流行らんようになるがな」と私。と家内が、「お父さんまた本買ってきたんか、2階の段ボール箱の本、100冊以上ある工、世界の名著、読んだんか？、読まへんやったら、早よ持って行って、売ってきて、読みもせん本を買ってくる人がいやはるしBOOK OFF はなりたつや！何も判らん人やな」。

(こじま よういち：農学研究科教授) 1

「情報化」と大学生

図書館運営委員 吉岡真佐樹

[ある学会発表から]

8月末、東京で開かれたある教育学関係の学会に参加した。私の出席した分科会の自由発表のなかに、「情報化がもたらす大学生の2次的調整」と題する、ある大学院生の調査研究があった。今日、大学は「情報化」に対応すべく人的物質的な努力を傾注している。しかしこの大学側の教育・研究改善のための努力も、「情報化」のなかで育った学生の学習態度や意識、作法との間にずれを生じているのではないか、というのが問題設定である。

この研究に言う「情報化」とは、要するに携帯電話とコンピューターの使用である。研究の中身は、首都圏の私立大学生を対象に、それらの普及度、利用状況と学習態度・意識の特徴を調査し分析したものであった。端的には、例えば、講義中に携帯電話でメールをやりとりしたり、期末レポートでネットから見つけた文章を切り貼り(カット・アンド・ペースト＝「カッペ」)して剽窃することに問題を感じるか否か、を携帯電話の利用頻度や一日の勉強時間との相関で分析する、といったものである。

この研究の問題関心そのものはきわめて実践的であり、興味深いものであった。ただし残念ながらその内容は、仮説、調査方法、考察、結論のそれぞれについて弱点が目立つものであり、予想通り、多くの参加者から延々と疑問や批判的発言が繰り返された。しかしこのやりとりを聞きながら、逆にこのテーマが数多

くの研究者・大学教員の関心の的となっていることに驚かされた。実際、質問者の何人かは現にこのようなテーマの研究に取り組んでいるようであった。

[ウェブサイトからの情報収集とレポート執筆]

この発表とその後の討論を聞きながら、私は日頃、漠然と考えている2つのことを改めて思い起こした。

一つは、この発表も問題にしていた、レポートや論文執筆に際して、ウェブサイトから入手した資料を用いる場合、それはどのようなルールに基づいて行われるべきか、という問題である。

今日、論文に引用文献として、[http://www. . .](http://www.)などといった「文献」を提示することが増加しつつある。自然科学分野では、「電子ジャーナル」「電子図書」からの引用はすでに一般化しており、原理的には印刷物を媒介せずに研究情報・成果のやりとりが行われているという。社会科学の分野でも、電子図書に加えて、政府文書、新聞等についてはウェブサイトからの引用が増加しつつある。外国研究を行う場合など、その国の図書館から直接電子情報として論文・統計が得られることはきわめて有益である。

しかし、ネット上には様々な性格や由来を持つ情報が飛び交っている。参考文献としてあげられているサイトを検索してみたら、当該の文書や資料はすでになくなっていたり、

修正されていた、といったことはよくあることである。あるいはサイトそのものがなくなっている場合もある。ウェブサイトから引用する場合は、日付を明記しておくことが鉄則である。しかしだからといって、このことは将来的に読者がその典拠に確実にアクセスできる保証とはなり得ない。

この問題は、学生のレポート作成(の指導)の際にはさらにやっかいな、複雑な問題となる。実際、レポートに限らず、ゼミ発表などの機会にも、学生はさまざまなサイトから情報入手してくるが、その中には、その基本的情報について明確な誤りがあるものも数多く含まれている。また出典の不確かなものも多い。引用文献のアドレスを見ても、それだけではそれがどのようなサイトであるかさえも推測するのが難しい場合もある。また、近年では、レポート作成のための「盗作」用のサイトも数多くできあがっているそうである。カット・アンド・ペーストの際の手続きについて、より具体的なルールを生み出していく議論の必要があるのではないだろうか。

[携帯電話と人間交際]

漠然と考えたもう一つのこと、携帯電話やパソコンを通じての日常的情報のやりとりというスタイルが、人間同士のつきあい方どのような影響を与えるのだろうか、という疑問である。

とにかく携帯は便利である。ほんの10年前まで、つまり携帯電話がない時代には、デートの待ち合わせ場所・時間のまちがいは致命的な悲劇に繋がった。彼女は来ない、家に電話をかけても誰も出ない……。その昔、「君の名は」というメロドラマがあったそうだが、この手の「すれ違い」ドラマはもはや存在しない。

その代わりに、待ち合わせ場所で聞かれるのは、「お前、今どこにオンネン？」京橋を過ぎたとこヤネン」とか「舞台に向かって右の後ろヤネン」てな会話である。

ゼミに遅れるのも簡単だ。かつてはゼミ発表の日に電車が遅れ、途方に暮れた学生も多かったはずだ。今は朝寝坊をしても、誰かに携帯をかけておけばすぐに先生に連絡してくれる。そしてバタバタとあわてた風に部屋に駆け込めば、先生も何となく許してくれる。

ある日のデートで、二人は些細なことからケンカをしてしまった。家に帰ってから反省しても、次に彼女に会うまでは謝ることはできない。しかし今は違う。思いついたらすぐ携帯。口に出せなければ、メールで十分。真夜中でも彼女に連絡はつく……。例をあげればきりがない。

もはや携帯のない生活など考えられないであろう。しかし、その急速な普及・発展の反面で、その負の影響というものはないのであろうか。それによって失われる「文化」、人間の能力、マナー、人間関係の在り方は、ないのであろうか。あるいは手当たり次第に人の写真をとる文化が、進歩的な、望ましい文化なのであろうか。

通勤の電車・バスのなかでの携帯電話。少しあらたまった面談の最中の着信音。情報化の進展の中で、ルール化の難しい問題は数多く生じている。しかしそれ以前の、議論の余地のない、当然守るべきマナーも多い。府大生の常識は信じたい。そしてその上に、新たな情報化のルールを積極的に議論していきたい。

(よしおか まさき：福祉社会学部教授)



----- この一冊の出会い -----

『ある西インドの資産 A West India Fortune』

文学部国際文化学科 川 分 圭 子

最近読書の内容が偏っていて、専門の本しか思いつかず、洋書の紹介となってしまった。お許しください。

私がこれまで読んだ中で一番感心した本の一つは、リチャード・ペアズ著の『ある西インドの資産 A West India Fortune』だろう。これは、イギリス南西部ドーセット州出身のピニー家という一族が、英領西インド諸島に砂糖プランテーションを経営し、その一方でブリストル商人として西インド貿易を通して財をなしていく過程を明らかにした研究書である。

ピニー家は、小規模な地主で、牧師等を輩出する一方、周辺農村で盛んであったレース製造業にも関与していた典型的なイギリス地方部の上層中産階級だった。しかしこの一族は清教徒革命時にピューリタン思想に傾斜し、王政復古後は非国教徒となる。1680年代、一家の一人は、カトリックに傾斜する国王ジェームズ2世に反対するモンマス公の反乱に荷担し、西インドに半ば亡命のような形でたどり着く。その後、最初はイギリスから西インドへの食料・雑貨の販売、次にはプランターへの前貸し、そして代金としての砂糖の受け取りから始まって砂糖取引へ、そして最後にはプランテーション経営へと、事業と資産を拡大していくのである。

こうして、ピニー家は、アメリカ独立戦争までの約百年間に多くのプランテーションを所有するようになり、そこで生産した砂糖をロンドンやブリストルの貿易商社に向けて輸出し、資産を築いた。しかし、その一方で、彼らの心は常にイングランドにあった。いや、心だけでなく体さえも、イングランドにあったといってよい。彼らは子供たちを必ずイギリスに送ってそこで教育したし、自らもできるだけ早く引退して帰国し、ドーセット州で郷紳として晩年を送った。そして、アメリカ独立戦争以後は、完全に西インドを引き揚げ代理人にプランテーション経営を任すことを決意し、その一方でブリストルに貿易商会を開業するのである。

19世紀以降の西インド経済は衰退に向かう。砂糖生産地が世界規模に拡大して大量生産が始まり、砂糖価格の低下が起きるからである。しかし、その一方で、イギリス政府は砂糖から高い財政関税を徴収し続け、また、英領西インドとアメリカ・ヨーロッパとの自由航行を阻み続けた。このような、砂糖の大量生産・低価格時代の到来と、その一方で重商主義的規制の継続という矛盾のなかで、英領西インドは半永久的不況の淵へと深く沈んでいくことになる。さらに、その上に、奴隷貿易・奴隷制廃止運動が高まり、西インド関係者は世論の厳しい批判にさらされた不名誉な存在となっていく。

しかし、ピニー家は不況の本格的到来の直前に、多くのプランテーションを売り抜け、被害を最小限に押さえることに成功した。19世紀の半ばにはすでに、ピニー家の資産は運河やドック会社、鉄道会社の株券や綿工業への出資で構成されており、西インドで資産を築いた痕跡は消えている。その一方彼らは、17世紀以来のドーセット州の領地とそこでのイギリス紳士としての生活を、維持し続けた。ペアズがこの本を書いた1950年にも彼らは「その古い家屋敷、古い農地、そして古い教会墓地に」いた。ペアズは、「あたかもこの州から彼らが一步も出たことがないかのような。」という言葉で、この本を結んでいる。

ピニー家の残した家は、私も実際見る機会を持ったが、それは慎ましいものだった。また、ペアズは、ピニー家の私生活や家族間の愛憎も描いており、私自身その土台となったピニー家の書簡等をブリストル大図書館で読んだが、それから見る限り彼らは普通のよき市民だった。彼らが求めたのは、一攫千金・濡れ手に粟の大儲けというのではなく、先祖代々の生活の維持であり、そのために必要な収入をその時代最も発展していた経済分野から得たにすぎない。また、彼らは、

的な思想を持っていた。

しかし、誰もが知っているように、西インドの砂糖プランテーションは黒人奴隷制の世界だった。なぜピニー一家のような普通の、むしろリベラルな思想の人々が、この残酷な制度から収入を得ることにほとんど疑問を持たずにいたか、これは今の人間から見れば大きな疑問である。しかし、砂糖生産は当時の経済に、20世紀における自動車などと同じと言っていいほど、重要な位置を占めていた。砂糖の流通自体や西インド向け製品の製造業に加え、ヨーロッパ・西インド間を行き交う船への保険やドック建設などの港湾整備、プランターたちへの前貸しを通して、保険・海運・金融などのサービス業が発達し、そこから収入を得る人々が増大していった。このように経済全体が砂糖プランテーション体制に依存する中で、この体制の負の部分を実際に考えようとする態度は容易には生まれてこなかったのだろう。

ともあれ、ペアズは、このような時代に生き、このような経済体制から収入を得ざるを得なかった人々の姿を、淡々と描いた。私としては、この淡々とした著述のほうが、奴隷制への怒りや西インド関係者への非難に満ちた書物よりも、西インド植民地体制の真実をより正しく理解させてくれる気がする。そして、現代の私たち自身、問題も多い経済体制に生きていながら、多くの深刻な問題を必要悪として見過ごし、放置して、次の世代の肩に押しつけつつあることをも、気付かせてくれるのである。

(かわわけ けいこ：文学部助教授)

ミニ情報 ※今回ご紹介いただきました『A West India Fortune』は、入手次第配架予定です。
 ~~~~~

### '03オープンキャンパス点描

7月24日(木)25日(金)の両日オープンキャンパスが開催され、図書館も多くの見学者を迎えました。

初めての夏休み時期の平日開催。通常開館しながらの開放事業となりました。勉強中の学生さんたちの気が散らないだろうか？という不安が杞憂に終わり、悲しいくらいに学生たちの姿のない閲覧室。先輩たちの一生懸命勉強する姿を受験生たちに見て欲しかった職員はちょっとがっかりでした。・・・夏休みでも、普段なら学生の姿があるのになあ。

さて、図書館の職員は、オープンキャンパス用シフトを組んで万全の体制でお出迎え。

特に1日目は前代未聞の見学者。4時を過ぎてカチカチカウンターの数字を見ると376人！（ちなみに、2日目は200人とかなり少なめでした）受験生はもちろん、父兄の方も続々と2階の閲覧室にやって来られました。

「どちらからですか？」と尋ねると「岡山県」「茨城県」「徳島県」など、バラエティ豊かな地域名にびっくり。もちろん「高校からです」と近所の高校名をあげる生徒さんや府内の高校の制服らしき姿も見かけました。

「この大学には の学科があるので、受験し

たいと思って見に来ました！」と夢と希望あふれる言葉には、こちらまで元気づけられる思いがしました。「受験頑張って、来年の春には図書館へ顔を見せてね。」と言うと「頑張ります！」とこれまた力強い返事。なんやかんや言われるけれど、現代の若者、しっかりしています。

「こちらには、府大の先生の書かれた本を集めていますのでご覧ください。」と声をかけると熱心に書架を眺める父兄の方々。中には、そのうちの1冊を手に取り、席に着くのも忘れて一心不乱に読みふける男子生徒さんもあり、またまた感心。

お昼ごろは、学部ガイダンスの時間割が大入り満員で変更になり、しばし休憩、とばかりに座席で涼んでいる女生徒たちの姿も見受けられました。こちらはちょっとお疲れ気味？

オープンキャンパス終了間際には、「地図ありますか？」と父兄の方からの問い合わせもありました。なんでも徳島から一家揃って車でお越しになり、帰り道を確認したいとのこと。大学見学は、本学を皮切りに、日を改めていくつか参加される予定だそうです。

そんなこんなの2日間。この中の何人が来年4月、今度は大学生として図書館に顔を見せてくれるのでしょうか？「頑張れ～！」と、心の中でエールをおくっていました。 (閲覧係記)

図書館日誌

第 2 回図書館運営委員会の報告

今年度第 2 回目の図書館運営委員会が 9 月 30 日(火)開催され、  
目録情報の遡及入力促進および研究室等のキャパシティ問題解決にむけて  
平成 16 年度図書館予算(案)について  
今年度図書館新規購入図書について(報告)

に関して、提案・議論された。

については、ワーキング・グループが 3 回開かれ、検討課題を資料情報のデータ化および電子ジャーナルの導入について検討していくこととし、前者について一定まとまったので委員会に提起することになった。配慮点として、先生方(研究室)の負担が少ない方式をとること、財政的観点を考慮することなどで、「データコピー方式」入力を採用したことが説明され、運営委員会としてこの提案が確認された。なお、実施には予算の措置が必要となる。図書館の情報化の基礎基盤なので引き続き議論して頂きたい旨、事務長の提起もされた。

の予算(案)は、經常分・主要事項分について、各ポイントの説明がなされた。質疑では、図書費要求の学生一人当たり 2.8 冊について、および本学ではどの程度になるのかの質問があり、それぞれ全大学の学生一人の図書館での購入図書数値で比較するのが、よりいいのではないかと、また、本学現在ベースは、0.5 冊程度になることが示された。原案どおり承認された。図書費に関して「教員とは別に、学生の教育条件整備の予算措置がされるように頑張ってもらいたい」旨の発言もあった。また、事務長より「今回予算要求計上はしていないが、視聴覚室の活用方法と予算要求方向についても、今後議論して頂きたい」旨の提起もされた。

の先生方選書の購入図書については、業者も決まった旨の説明があり、了承された。

今年度の運営委員会の方向は、ワーキンググループの検討を引き続き行い、次回は、11 月 13 日(木)に開催することを確認した。

行事予定

10 月

11 月

12 月

○ 1 日(水)~31 日(金) 通常開館  
開館時間:午前 9 時~午後 8 時

○ 3 日(月) 休館 (文化の日)

○ 1 日(月)~22 日(月) 通常開館  
開館時間:午前 9 時~午後 8 時

○ 13 日(月) 休館 (体育の日)

○ 4 日(火)~28 日(金) 通常開館  
開館時間:午前 9 時~午後 8 時

○ 10 日(水)~26 日(金)  
冬休み長期貸出実施

毎週土・日曜日は休館です

○ 5 日(水) 休館 (創立記念日)

○ 7 日(金) 4 時 45 分閉館 (六公立戦) (貸出冊数 6 冊以内、返却期限 1 月 15 日(木))

○ 20 日(木) 4 時 45 分閉館 (推薦入試)

○ 23 日(火) 休館 (天皇誕生日)

○ 24 日(月) 休館 (振替休日)

○ 24 日(水)~1 月 7 日(水)  
冬期休業  
開館時間:午前 9 時~午後 4 時 45 分

鍵付ロッカーをご利用ください

ロッカールームの床などにカバンや荷物等を放置されている方を多く見受けます。  
鍵はカウンターでお渡ししますので、入室の際、「図書館利用カード」をご呈示ください。

○ 29 日(月)~1 月 2 日(金)  
年末年始の休館  
新年は 1 月 5 日(月)から開館します